

## 平成27年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	早稲田大学 政治経済学術院	職名	助手	助成金額	40万円
氏名	大嶋えり子	印	メール アドレス		
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）					
<b>フランスにおけるアルジェリアの記憶</b> <b>—1990年代以降における「承認」と「統合」の政治—</b>					
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）					
<p>1990年代以降、フランス政府はアルジェリアの植民地支配（1830年～1962年）や独立戦争（1954年～1962年）の記憶を記念碑や博物館、法律の中で多く取り上げるようになった。アルジェリアの解放以降、アルジェリアに関して、引揚者に対する補助金制度などを除いて、長い沈黙を続けたため、1990年代以降のフランス政府の行動は大きな態度の変化を表しているといえるだろう。この変化に本研究課題は注目している。</p> <p>助成金は次のとおり使用した。</p> <p>(1) アルジェリアに対して、フランス政府がどういった責任を負っているのか、すなわちどういった加害を行ったのかを検討し、他の国家による不正の事例と比較した。取り上げた事例はドイツ政府やドイツ企業によるヘレロ人への加害、日系アメリカ人および日系カナダ人の強制収容、ホロコースト、奴隷貿易・奴隷制である。これらの事例について知識を深めるための研究書の購入に助成金を使用した。研究成果は所属大学主催の研究会で発表した（下記参照）。</p> <p>(2) フランスの国内法の中で、アルジェリアの記憶がどう取り上げられているのかを検討した。1999年の「アルジェリア戦争」という呼称を正式に認める法律とその制定過程、および、2005年の「帰還者」（ヨーロッパ系引揚者とフランス軍とともに戦ったアルジェリアの先住民族の人々でフランス本土に移住した者の法律上の総称）に対し感謝の意を表明し、交付金を与える法律とその制定過程を分析した。2014年の日本国際政治学会研究大会で発表した内容を精緻化するために、より多くの資料を検討し、投稿論文にまとめた。資料入手、論文作成および投稿にかかる経費に助成金を使用した。論文は日本国際政治学会の学術誌に投稿した（下記参照）。</p> <p>(3) 2016年2月から3月にかけて、2週間パリに滞在し、研究の調査を行った。具体的にはパリ市内にある記念碑および引揚者団体などの資料を調査した。所属大学から受給した研究費に加えて、助成金をフランスにおける交通費やフランス国立図書館利用料などに使用した。</p> <p>(4) 以上に加えて、移動時に使用できるPCの購入、文具購入などの研究環境整備に使用した。</p>					
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合はURLを記載すること。）					
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)		
大嶋えり子	アルジェリアに対するフランスの責任 —国家による不正行為の記憶はどう承認されるのか—	早稲田大学 地域・地域間研究機構 (ORIS) 若手研究会 討論者: 永原陽子教授 (京都大学)	2015年12月10日		
大嶋えり子	フランスにおけるアルジェリアに関わる「記憶関連法」 —記憶と国民的結合を巡って—	日本国際政治学会『国際政治』(有斐閣)	2016年3月下旬 (予定)		